

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年06月03日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究（B）（海外学術調査）

研究期間：2010～2012

課題番号：22401019

研究課題名（和文）中国における「岩彩画」の登場と戦後日本画のメチエ

研究課題名（英文）The technique and materials of “NIHONGA /Japanese -style painting” in the post-World War II, and the appearance of “GANSAIGA” in China.

研究代表者：関 出（SEKI IZURU）
東京芸術大学・美術学部・教授

研究者番号：60154639

研究成果の概要（和文）：

渡航調査（中国6回、台湾1回）によって、主要な美術大学や画家アトリエを歴訪し、「岩彩画」を中心に中国画の情報収集と分析を進め、その登場と現状がいかにあるのかを明らかにした。中国と日本の絵画の淵源を探り、水墨画と彩色画へと独自に異なる方向をたどった来歴を検討することによって、今日、中国絵画における「岩彩画」の位置づけに関する背景と、戦後の「日本画」における絵画組成上の形態と変容とを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

We visited the major universities of fine arts and the atelier of the artists during an overseas research. (six times to People's Republic of China, once to Taiwan Republic of China). After advanced analysis and information collection of Chinese painting in particularly “GANSAIGA”, we researched the current situation and the appearance of “GANSAIGA” in China. By reviewing the history in search for the origin of Japanese and Chinese painting that followed development of two different style of paintings, one being colored picture and the other ink painting, we made clear the transformation of style, technique and materials in the post-World War II “NIHONGA /Japanese painting”, and the background about the position of “GANSAIGA” in Chinese painting in present-day.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2011年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2012年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
総計	12,600,000	3,780,000	16,380,000

研究分野：人文学A

科研費の分科・細目：美学・美術史

1. 研究開始当初の背景

(1)「日本画」と「中国画」は、日中それぞれの近代化にともない国号を冠して誕生した近代絵画であり、両国におけるアカデミズムの中核を担っているが、ともに東洋絵画の伝統を受け継ぎながらも、これまでの数十年間、相互の興味と情報が不十分なまま平行に歩んできた。

①中国画は文人水墨画を全面的に継承した。
②日本画は彩色画として発展し、明治以後100年の間に、天然岩絵具という伝統的な彩色材料を人工化するなど、色材の展開により独自の彩色画となっていた。

(2)“留学生10万人計画”(1983年中曽根首相の提言)によって来日し日本画を学んだ中国人留学生が、1990年代から日本画の思想と技法材料を中国に伝播させ、その影響は少なからず広がりを見せていた。

①留学生たちは、当時の中国画に欠けていた日本画の自由と現代性を評価し、以後、岩絵具を中国で国産し「岩彩画」という新ジャンルを立ち上げた。

②留学経験者の多くは、帰国後、中国の美術大学で指導的な立場となり、中国画教育に岩彩画を導入した。

③美術大学からは日本画を直接的には知らない「岩彩画」の第二世代が輩出されている。

(3)「日本画」ではなく「岩彩画」と命名された岩絵具による彩色絵画は、文人水墨画を中心とした中国画壇に無視できない潮流を作って賛否両論を起こしていた。

①反対論：文人画こそ中国画であり岩彩画は日本のもの。可能性は認めるが中国画ではなく総合芸術(メディアアート)に位置付ける。

②賛成論：「岩彩画」を文人画以前の中国絵画である敦煌壁画に典拠させて、「岩彩画」が中国絵画の正当性を持つと主張する。

2. 研究の目的

(1)「岩彩画」に関する情報は、研究代表者らがこれまでに留学生指導や渡航調査によって収集してきたものだが、決して広く知られるものではない。中国における「岩彩画」の登場と需要の実態を現地に赴くことによって詳細に調査することを目的とする。

①かつての留学生から聞き取り調査を行う。

②中国各地の主要な美術大学を歴訪し、「岩彩画」教育の導入状況と教育方法について、調査する。

③「岩彩画」に不可欠な岩絵具という材料を供給している中国国内の画材メーカーを訪問調査し、日本で開発された岩絵具の製造技術との関係を明らかにする。

(2)中国的視点から「岩彩画」をとらえる。

①中国画の主流である「文人水墨画」と伝統的彩色画の系譜である「工筆画」の現況と美術大学における教育方法を調査し、従来の中国画から見た「岩彩画」の位置を確認する。
②特に「工筆画」と「岩彩画」の差異について明らかにする。

(3)「戦後日本画」を東洋絵画の中で相対的に位置付ける。

中国人留学生が在籍していた頃の日本の美術大学の状況や日本画壇の状況を分析的に振り返り、今後の「日本画」と「岩彩画」が東洋絵画において向かうべき方向性、担うべき役割について、日本画実技、日本東洋美術史の両側面から検証する。

3. 研究の方法

本科研の調査は、日本留学の経験を持つ画家たちとのネットワークを活用することとなった。

(1)2010年度には、中国へ10月に調査渡航し、広州美術学院、広州美術学院大学城キャンパス、岩彩画工作室、広東省博物館、嶺南画派記念館を訪問した。

①岩彩画実習の見学(万小寧教授、馬文西教授、林國強元副教授)

②講演会「東京芸術大学日本画教育の120年」

③「中日岩彩画教育と東洋画の将来展望」シンポジウム(広州美術学院大学城美術館)

④「中日岩彩画教育と東洋画の将来展望」セミナー(大学城キャンパス、岩彩画工作室)

(2)2011年度には中国へ2回(5月、9月)、台湾へ1回(10月)調査渡航した。

①北京 中国美術館訪問(範迪安館長、胡偉副館長)。中央美術学院、大学美術館、中国画院院生アトリエ、金碧齋(岩絵具製造工場)[798]芸術地区を見学。諏平教授(中央美術学院副院長)王瑛生教授(大学美術館長)

※当初3月下旬に渡航する計画であったが、東北地方太平洋沖地震により延期実施した。

②敦煌 国際学術研討会“敦煌意象”参加。候黎明敦煌研究院美術研究所所長、馬強敦煌研究院美術研究所副所長、姜婕敦煌研究院美術研究所研究員、ほか京都市立芸術大学日本画教員(9名)。

趙俊榮敦煌研究院美術研究所研究員 画室。
莫高窟見学、榆林窟見学。

③台湾 台北、台中。
国立台湾芸術大学訪問（筆墨指導の教室も）
国立台湾師範大学訪問（保存修復センター）
国立故宮博物院見学（范寛、郭熙、李唐など）
私立東海大学（台湾唯一 膠彩画専修コース）

※2月には、京都国立博物館にて開催中の特別展「中国近代絵画と日本」を鑑賞した。本科研の研究課題と合致した企画内容であり、研究上の具体的な示唆を展示作品から得る機会となった。

（3）2012年度には中国へ3回調査渡航した。

①6月には、北京と天津の調査を実施した。北京、中央美術学院では大学美術館にて2012年卒業生優秀作品展を見学し、館員との意見交換も行った。その後、首都師範大学美術学院、清華大学美術学院を訪問し、関係する各教員との意見交換の場を得て、学生や教員の各アトリエで制作の状況を見学した。天津では、第一線で活躍する何家英氏（現代中国工筆画家）のアトリエ訪問、および天津美術館、博物館にて情報収集を行った。

※秋には、日中両国間の解決困難な摩擦問題（尖閣諸島問題）が激化する状況となり、渡航計画を変更せざるを得ない面もあったが、文化交流に関する人的ネットワークの重要性については、あらためてその認識を強めた。

②11月には、北京と杭州へ渡航調査した。胡明哲教授（中央美術学院実験芸術系）ほか蔣采蘋元教授、著名な画家達の各アトリエにて作品を見学し、意見交換した。杭州の中国美術学院では、林海鐘教授のアトリエ訪問および南山キャンパスの見学を行った。また、象山キャンパス、公共芸術学院壁画系・王雄飛教授岩彩画研究所などを見学、および意見交換した。

③12月には、広州美術学院を訪問、学部生岩彩画卒業制作と壁画模写、大学院生の岩彩画を対象に作品講評会を実施した。旧知の陳文光教授と有意義な意見交換の機会を得た。

（4）本科研の公開研究会は、東京芸術大学講義室にて合計5回開催した。2010年度（6月、12月）、2011年度（11月、2012年3月）、2013年2月には、本科研の纏めとなる、発表と報告の最終回として、第5回公開研究会を開催した。（参加者は約60名）

渡航調査と人的交流を通して、「岩彩画」に関する本科研課題の研究を展開した。

4. 研究成果

日本への留学経験者で、旧知の教員や画家の

存在が、日中間相互の理解や意思疎通に大きく役立ち、訪問調査の成果を高めた。また、研究代表者と分担者各人が持っている現地研究者との関係を相互に共有し、人的ネットワークを有効的で密に形成することで研究者間の交流も広がり、日本画と中国画の関係構築の基礎を築く意見交換を行い、両国の絵画を東洋絵画の中で相対的に位置付け、これ迄は、知られていなかった実態認識を得た。

①中国でのシンポジウムからも、中国国内における「岩彩画」の現況とその評価を把握することが可能な意義ある機会として参加し、それに加えて岩彩画演習の視察、講演の実施によって現地調査を円滑に推進した。

②渡航調査によって、「岩彩画」実技教育において「古代壁画模写（敦煌あるいはキジルの石窟壁画など）による技法材料へのアプローチ」が必須なカリキュラムとして、各美術

大学で重視されている実情を確認した。このことは、中国の「岩彩画教育に対する認識」を分析するうえで重要な基礎情報となった。

③中国の教育・文化行政からは一定の認証があるものの、中国文化の主流とする「国画系（中国画）＝水墨表現」とは、別領域の造形表現として「岩彩画＝総合材料系」は、厳然と位置付けられている。その状況から、「岩彩画技法」を体得した日本留学経験者は、画家や教育者として各様に制作形態と発表の場を展開している。一方において、「岩彩画」の手ほどきを受けた次世代も含め、若手画家たちの鋭敏な感覚で時代性をとらえ、「水墨写意画」「工筆重彩画」「岩彩画」に、新風を起す意識の変革や流動性への兆しに、今後の推移が大いに注目される。

④公開発表会では、研究組織の各研究者や研究協力者が、これまでに行ってきた調査成果を広く公開し、研究チーム以外の専門家からも意見を聴取し、中国画と日本画の将来展望や期待される交流事業への提言を行った。

⑤「岩彩画」を啓発した「戦後日本画」の研究を強化し、東洋画の近代史の中でどのように位置付けられるものであるかについての、課題（「東洋絵画における水墨と彩色の両軸性」、「国号を冠する絵画表現と技法材料」、「岩絵具に偏重した戦後日本画の相対的評価と将来像」など）に資する基礎認識を得た。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕（計22件）

- ①大竹卓民(画家・研究協力者)
本科研第5回公開研究会 2013年02月17日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「中国における「岩彩画」の登場」
- ②荒井 経(東京芸術大学大学院准教授・研究分担者・保存修復日本画)
本科研第5回公開研究会 2013年02月17日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「中国における「岩彩画」の評価」
- ③佐藤道信(東京芸術大学教授・研究分担者・日本東洋美術史)
本科研第5回公開研究会 2013年02月17日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「岩彩画—古典というアイデンティティー」
- ④塩谷 純(東京文化財研究所・招聘講演者・研究協力者)
本科研第4回公開研究会 2012年03月18日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「近代日本画における筆技の消長」
- ⑤加藤弘子(東京都現代美術館・招聘講演者・研究協力者)
本科研第4回公開研究会 2012年03月18日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「1980年以後の日本画」
- ⑥関 出(東京芸術大学教授・研究代表者・日本画)
本科研第4回公開研究会 2012年03月18日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「絵画組成の移り変わり」
- ⑦荒井 経(東京芸術大学大学院准教授・研究分担者・保存修復日本画)
本科研第4回公開研究会 2012年03月18日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「近代に見出された岩絵具と和紙 ～材料神話を越えて」
- ⑧小島徳朗(京都市立芸術大学専任講師・研究分担者・日本画)
本科研第4回公開研究会 2012年03月18日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「京都芸大日本画教育における現在と、その可能性についての考察」
- ⑨佐藤道信(東京芸術大学教授・研究分担者・日本東洋美術史)
本科研第3回公開研究会 2011年11月05日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「日本の外国文化理解一人よりモノ、外交より貿易中心の」
- ⑩古田 亮(東京芸術大学美術館准教授・研

- 究分担者)
本科研第3回公開研究会 2011年11月05日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「敦煌壁画から日本画へ モチーフと彩色表現」
- ⑪吉田千鶴子(東京芸術大学教授・研究協力者・教育資料編纂室)
本科研第3回公開研究会 2011年11月05日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「東京美術学校の中国人留学生 最近の研究・顕彰の動向」
- ⑫斉藤典彦(東京芸術大学教授・研究分担者・日本画)
本科研第3回公開研究会 2011年11月05日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「台湾の美術系大学と膠彩画」
- ⑬関 出(東京芸術大学教授・研究代表者・日本画)
国際学術研究会“敦煌意象” 中国・敦煌研究院学術報告庁 国家古代壁画保存工程技术中心 2011年09月10日
「東京芸術大学の日本画実技教育と“敦煌壁画”」
- ⑭荒井 経(東京芸術大学大学院准教授・研究分担者・保存修復日本画)
国際学術研究会“敦煌意象” 中国・敦煌研究院学術報告庁 国家古代壁画保存工程技术中心 2011年09月10日
「絵画ジャンルの形成と模写」
- ⑮小島徳朗(京都市立芸術大学専任講師・研究分担者・日本画)
国際学術研究会“敦煌意象” 中国・敦煌研究院学術報告庁 国家古代壁画保存工程技术中心 2011年09月10日
「岩彩表現の可能性の探究」
- ⑯大竹卓民(画家・研究協力者)
国際学術研究会“敦煌意象” 中国・敦煌研究院学術報告庁 国家古代壁画保存工程技术中心 2011年09月10日
「試論 敦煌早期壁画における“面構”様式」
- ⑰荒井 経(東京芸術大学大学院准教授・研究分担者・保存修復日本画)
本科研第2回公開研究会 2010年12月18日
場所:東京芸術大学中央棟講義室
「中日の岩彩画教育と東洋画の将来展望」
- ⑱杵名弘美(保存修復研究家・研究協力者)
本科研第2回公開研究会 2010年12月18日
場所:東京芸術大学中央棟講義室

「日本人留学生が見た中国画教育の現状」

①関 出 (東京芸術大学教授・研究代表者・日本画) 二国間交流事業 2010年10月26日

「中日の岩彩画教育と東洋画の将来展望」
場所：中国広州美術学院大学城校区講義室
「東京芸術大学日本画教育の120年」
大竹卓民 (画家・研究協力者)

「東方色彩・中国意象」2010年09月10日
場所：中国広州美術学院美術館
「中国岩彩画20年と現代中国絵画」

②関 出 (東京芸術大学教授・研究代表者・日本画)

本科研第1回公開研究会 2010年06月26日
場所：東京芸術大学中央棟講義室
「日本の90年代・東京芸術大学と画学生」

③荒井 経 (東京芸術大学大学院准教授・研究分担者・保存修復日本画)

本科研第1回公開研究会 2010年06月26日
場所：東京芸術大学中央棟講義室
「いま日中交流の必要性」

④大竹卓民 (画家・研究協力者)

本科研第1回公開研究会 2010年06月26日
場所：東京芸術大学中央棟講義室
「90年代の留学生と帰国後の動向」

[その他]

ホームページ等

www.geidai.ac.jp/labs/gansaiga/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関 出 (SEKI IZURU)
東京芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：60154639

(2) 研究分担者

佐藤 道信 (SATO DOSHIN)
東京芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：30154074

斉藤 典彦 (SAITO NORIHIKO)
東京芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：60272647

古田 亮 (FURUTA RYO)
東京芸術大学・大学美術館・准教授
研究者番号：20259998

荒井 経 (ARAI KEI)
東京芸術大学大学院・美術研究科・准教授
研究者番号：60361739

小島 徳朗 (KOJIMA TOKURO)
京都市立芸術大学・美術学部・講師
研究者番号：70548263

(3) 研究協力者

川又 聡 (KAWAMATA SATOSHI)
東京芸術大学・教育研究助手

大竹 卓民 (OTAKE TAKUMIN)
画家

吉田 千鶴子 (YOSHIDA CHIZUKO)
東京芸術大学・教育資料編纂室

大竹 彩奈 (OTAKE AYANA)
東京芸術大学・教育研究助手

武田 裕子 (TAKEDA HIROKO)
東京芸術大学大学院・博士後期課程修了

後藤 亮子 (GOTO RYOKO)
東京芸術大学卒業、中国美術学院修了

金澤 友那 (KANAZAWA YUNA)
東京芸術大学大学院修了・中央美術学院博士

平 諭一郎 (TAIRA YUITIRO)
東京芸術大学・教育研究助手

杓名 弘美 (KUTSUNA HIROMI)
東京芸術大学大学院修了・中国美術学院修了

劉 丹 (RYU TAN)
大連理工大学助教

加藤 弘子 (KATO HIROKO)
東京現代美術館・学芸員

塩谷 順 (SHIOYA JYUN)
東京文化財研究所・研究員